

7月の参議選で与党が初めて衆参過半数割れとなった。国民民主そして参政党が伸び、反面で野党ではれいわを除き軒並み票を減らした。特徴的なのは生活苦また不安をなんとかせよとの思いが突出していることだ。

選挙の初戦は、消費税の減税また廃止など経済が論戦の中心とみられた。だが中盤から突如外国人排斥問題に切り替わり、参政党の街頭演説が繰り出す数々の断定的な主張に聴衆は惹きつけられ最終盤に至った。結果として自公は参議院においても与党のみで法案成立は不可能となり、国会は本来の論戦を取り戻す構成となった。

強い言葉に惹かれる



この参議選の投票率は前回より+6.4の58.5%と異例に上昇した。

その要因を考えてみる。

'97年以降、自民政策はデフレ経済を経て賃金低下を今日までもたらしている。それでもなんとか人々は生活を維持してきた。だが2年前からの物価上昇にこの先暮らしていけないのではないかと多くの有権者は危機感を抱いた。心に余裕がなくなったところに参政党の「日本人ファース

ト」は現実では得られない自信とか希望を与えてくれるのではないかと惹かれ、大衆を動かしたのは間違いない。5月に公表した「創憲」案を不利と見た同党は街頭演説では封印し、食や働き方そして外国人への違和感を強調し無関心層を高揚させ支持に繋げた。どっと動いた無党派層は支持し、その結果投票率を上げたのではないか。

見過ごさない闘いへ



結党まもない参政党の実態を恐らく支持者は知らずまた知らされずに投票したと思われる。爆増した議席に危惧を覚えるとともに、この現象を過小評価すべきではないと考える。

「創憲」がいう民主制を天皇君主制に戻すとの考えを理解して行動したとはとても思えない。歴史を軽薄に捉え物事を断言する強き者に生活苦は惹かれ易く、ナチスの例を引くまでもなく同党の動きを見過ごさないことが肝心だ。大切なことは民主制を破壊させないよう闘い続けること。平和な生活は民主制の下でしかつくりえないことを発信し続けたい。

野田・九条の会発足に尽力され、以来事務局の活動を支えてくださった田中浅男さんが、7月14日、94歳で亡くされました。ご逝去を悼み、生涯貫かれた平和への思いを、九条通信100号記念号（2014年4月）より抜粋してご紹介します。

野田・九条の会事務局

戦争なんかで死んではならない

私の生まれた1931年は、関東軍が日中戦争の契機となった柳条湖事件を起こした年でした。生まれた時から戦争で、学校では徹底的な愛国教育。新聞、ラジオも国民を戦争へと駆り立てていました。

そんな時代に育ったのですが、なぜか私は「軍国少年」にならなかったのです。思い当たるのは50軒ほどの小さな部落に「この戦争は負ける」「早く終わればいいんだ。みんな早く帰ってほしいんだ」と言っていた年寄りが二人いたことです。

私の家は父を早く亡くしたこともあり、私たちのために母が懸命に働いていました。そんな母の姿を見ていた私にとって年寄り二人の言動は、心に沁み「国の言っていることを信じてばかりはいられない」と思ったのでしょう。この言動が終戦まで密告されることもなかったのは、誰もが口に出せずにいた思いだったからなのではないでしょうか。

この密かではあるけれども切実な思いの結晶こそ憲法九条だと私は考え戦後69年、軍備によらない平和の実現を目指して歩んできました。………… 私たちの願いは日々幸せに暮らし命を全うすることです。この素朴な思いに足場を置いて憲法九条を考えていかなければならないと思っています。国のために戦争なんかで死んではならないのです。

田中浅男